日本建築学会九州支部研究報告
第 52 号　2013 年 3 月

旧赤崎邸（旅館白磯）の現状と関係者

準会員○岩元志織[*1]　正会員　辻原万規彦[*2]
正会員　今村　仁美[*3]

9. 建築歴史・意匠－2. 日本近代建築史　建築歴史・意匠
赤崎伝三郎、天草、和洋折衷、棟札、みくに新聞

１．はじめに

旧赤崎[1] 邸（旅館白磯）は個人住宅として建てられた和洋折衷の建築物であり、天草市高浜南に所在する。赤崎邸を建てた赤崎伝三郎は、日露戦争時、一般市民でありながらマダガスカル島からロシア軍の動向を日本に報告し、母国への愛国心による偉業を成し遂げたことで知られている[2]。しかし、帰国後の様子について記載された文献は少なく、不明な点も多い。

本稿では、マダガスカル島から帰国した後に故郷の活性化に貢献した赤崎伝三郎が建てた自邸の詳細について報告する。旧赤崎邸は『天草建設文化史』[3] にも掲載されておらず、これまで、その詳細は明らかにされていなかったが、実測図面を作成し、関係者への聞き取り調査を行うことができた。

２．赤崎伝三郎の略歴[2]

赤崎伝三郎は現在の天草市高浜の出身であり、一攫千金を夢見て海外へ渡航した。当時日本人未踏の地であり、商売のうまくいく可能性を秘めたマダガスカル島でロシア兵相手にバーの経営を始めた。日露戦争時にはバルチック艦隊の動向をインドのボンペイ日本領事館宛に打電し、日本の勝利に貢献した。その後は「オテル・ドゥ・ジャポー」や「シネマ・ドゥ・ジャポー」を経営し、マダガスカル島で成功した。

帰国後、赤崎伝三郎は天草のいくつかの建物の建設に関わった。帰国した昭和4（1929）年から亡くなる昭和21（1946）年を含む昭和26年までの「みくに新聞」を閲覧し、赤崎伝三郎に関する記事を抽出した。「みくに新聞」は当時天草で発行されていた新聞であるが、昭和15（1940）年から昭和20年までの5年間は国策に従い廃刊されたために記事はない。なお、現在は、天草市立天草アーカイブズに所蔵されている。これらの記事と後述する旅館白磯所蔵の古写真とその裏書きなどから、伝三郎が関係した建物をまとめた（表1）。

表１　赤崎伝三郎が関わった建物

日付	建物	典処
S5. 11. 23	高浜尋常小学校皿山分教場建設上棟式　老朽化した学校の改築	写真、『波涛を越えて』
S6. 4. 12	高浜尋常小学校皿山分教場落成式　付帯建築二棟の新築	写真
S6. 7.	高濱尋常小学校校起工	みくに新聞
S6. 10. 11	高浜尋常小学校皿山分教場感謝碑 除幕式	写真
S7. 5. 20	高濱尋常小学校校新築落成式　伝三郎は奉安殿を寄付	みくに新聞
S7. 4. 30	皿山白糸瀧観音堂改築	写真
S10. 3. 20	下津深江温泉（望洋閣）　元学校敷地に建築予定	みくに新聞
S10. 10. 20	下津深江温泉（望洋閣）　工費一万五百円で建築中	みくに新聞
S11. 3. 17	望洋閣落成式　社長赤崎伝三郎	みくに新聞
S12. 2. 20	下田深江温泉株式会社望洋閣 解散	みくに新聞
S12.	赤崎邸 建設費二万五千円の豪邸を高浜にかまえる	棟札、『波涛を越えて』
S18. 5. 5	赤崎邸 松竹映画『花咲く港』一行と記念写真撮影	写真
S21. 4. 23	伝三郎死去	
S25. 5	白磯ホテル（旧赤崎邸）開業　主人赤崎八十八	みくに新聞

３．旧赤崎邸の現状

2011年12月21日、22日、2012年6月29日、7月6日、9月20日、30日、10月5日、11日に、旧赤崎邸（旅館白磯）で実測を行い、図面を作成した。旧赤崎邸は、図1のように、旅館として使用されている木造瓦葺2階建ての「本館」と「倉庫」、住居や物置として使用されている木造瓦葺平屋建ての「離れ」からなる。さらに、本館の南角には木造モルタル仕上げ2階建ての「洋館」が付属している。

旅館白磯には赤崎邸建設当時の設計図6枚（表2、全てデジタル化済）のほか、各種写真や書簡などが保管されている。写真と書簡は熊本県立大学文学部米谷研究室により整理、分類された後に、目録が作成され、写真は全てスキャンされてデジタル化されている。また、旅館白磯の赤崎巧一氏に聞き取りを行った。

実測図と設計図、聞き取りなどから、次のようなことがわかった。門を入った正面に旧赤崎邸の本館があり、その北側に倉庫がある。門を入って左手が離れであり、赤崎伝三郎がこの土地を買った時はすでに建てられていた。敷地は塀と生け垣に囲まれ、庭園の池跡や井戸が残っている。表2中の図面1と2の基礎伏図に

Present Condition and Persons involved in the Former Akasaki Residence (Shiraiso Ryokan)
IWAMOTO Shiori, TSUJIHARA Makihiko and IMAMURA Satomi

より、図1中の本館1階平面図の灰色で示した浴室、脱衣室ならびに廊下は増築されていることがわかる。昭和45（1970）年に起きた火事で炊事場と倉庫の一部が焼失した（本館1階北角の「炊事場跡」付近）ため、本館の勝手口背後の土間を板敷きとし、現在は厨房として使っている。なお、図1中の本館1階平面図の斜線部は聞き取りのみで図面を作成した。また、聞き取りによれば、建設当時から便所は和式と洋式（水洗便所）、浴室は五右衛門風呂と洋式の風呂、台所には竈とオーブンがあり、すべて和洋折衷の作りであった。五右衛門風呂は現在は男子便所になっており、炊事場跡には

表2　旅館白磯所蔵の設計図

	図面のタイトルと縮尺	内容
1	基礎伏図（1/100）	本館と倉庫の１階基礎伏
2	赤崎邸新築設計図（1/100）	本館と倉庫の２階床伏と小屋伏
3	赤崎邸新築工事設計図Ⅰ（1/100）	洋館の基礎伏、床伏、小屋伏、平面、軸組
4	赤崎邸新築工事設計図Ⅱ（1/100、1/10、1/20）	洋館の立面、小屋組詳細、バルコニー断面、各部詳細
5	赤崎邸新築工事設計図Ⅲ（1/20）	洋館の断面、書斎天井伏、応接室飾棚平面詳細、金庫平面、天井中心飾平面
6	赤崎邸新築工事設計図Ⅳ（1/20）	洋館の階段詳細、玄関詳細、便所断面

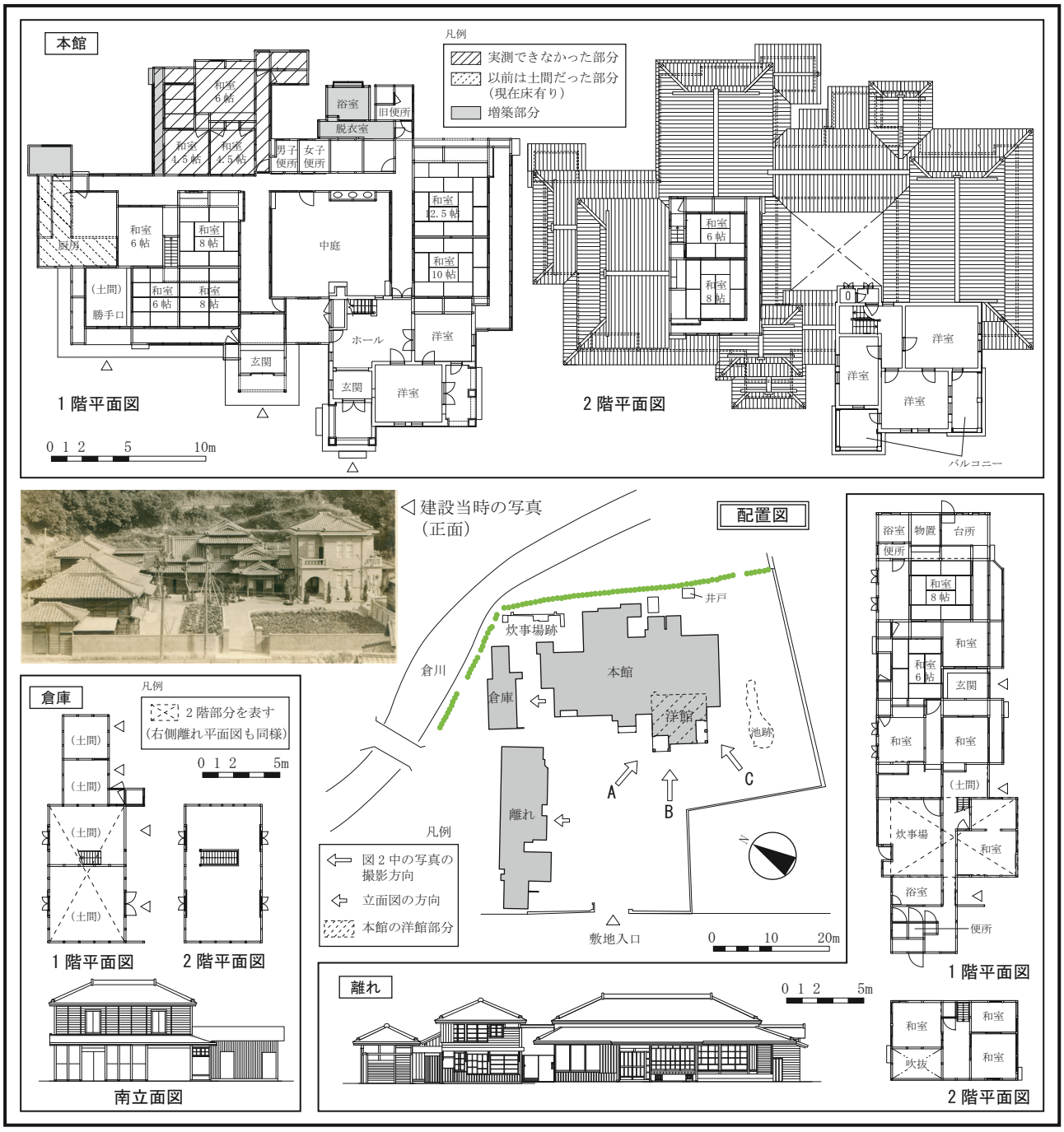

図１　旧赤崎邸（旅館白磯）の実測による配置図と平面図

竈跡が残っている。

洋館は、1階が応接室と書斎、2階が寝室、和室、納戸として設計された。一方本館には、和室、大広間、浴室があったが、伝三郎夫妻は北側の三畳一間の和室で質素に暮らしていた。また、旅館白磯所蔵の書簡によれば、当初は生家のある皿山地区に建設を予定していた。事情により、現在地の高浜に建てられたが、建設用の木材は皿山地区で調達された可能性が高い。

図2に実測による立面図（4面のうち2面は省略）を示す。なお、洋館は灰色で示している。あわせて、設計時の洋館部分の立面を表2中の図面4から一部抜粋して図2中に示す。図2中の写真の撮影方向は図1中に示す通りである。両者を比較すると、施工時に変更されたと考えられる箇所があることがわかる。

西立面の設計図では洋館1階中央の窓は出窓で設計されているが、実際は窓が2つのみで出窓ではない。2階の玄関上部の窓の形状は設計図には四角い窓が4つあるが、他の窓と同様の上げ下げ窓1つに変更され、2階バルコニーの手すりのデザインも異なっている。さらに、洋館北側の玄関のアーチ横にある円窓も2つから1つに変更されており、東側の2階には上げ下げ窓が1つ加えられたと考えられる（図面は省略）。

４．旧赤崎邸に関わった人々

本館2階の小屋裏と離れの1階小屋裏から棟札が発見された。取り外すことができず、本館は表と裏、離れは表の確認できる範囲を読み取った。赤崎邸の本館は昭和12（1937）年に建てられたと言われていたが、「昭和拾貳年」と書かれた棟札（図3）によって確認できた。また、離れは松国福太郎により、大正3（1914）年に建てられたことがわかった（図4）。本館の棟札の表面には、家主の赤崎伝三郎と工匠の鶴崎[1]作太郎の名前が記されており、鶴崎作太郎が棟梁であったと考えられる。一方、設計者については、棟札には名前がないものの里美仙松が担当したと言われている。

図２　旧赤崎邸（旅館白磯）の洋館部分の立面における設計時と現状との比較

そこで、鶴崎作太郎の息子である鶴崎千春氏、里美仙松の娘である里美チサヨ氏と孫弟子の松原幸高氏、郷土史家の松本教男氏を対象に聞き取りを行った。

（１）棟梁

聞き取りから以下のようなことが分かった。

鶴崎作太郎は高浜出身の大工であった。始めは赤崎伝三郎によって建てられた高浜尋常小学校皿山分教場や観音堂を手がけ、後には皿山地区の建築の一切を請負ったと言われている。高浜で評判の大工となり、伝三郎の依頼で棟梁として赤崎邸建設に関わった。また、葬式用の霊屋や卒塔婆も作っていた。棟札に記載されている他の工匠のうち、離れの棟梁の1人である植村冨次郎とは兄弟弟子であり、小森政義、石黒勝喜、松本金五郎など弟子が4、5人いたと言われている。

（２）設計者

赤崎巧一氏への聞き取りによれば、赤崎邸の設計監理は長崎県出身の里美仙松が当地に3年程滞在して担当したとのことであるが、棟札にはその名前が記されていなかった。しかし、里美チサヨ氏と松原幸高氏（天草市高浜在住）への聞き取りで、里美仙松は赤崎伝三郎とは縁戚関係にあったために設計を依頼されたとの証言が得られた。さらに、洋館前で撮影された伝三郎と里美仙松家の写真が残っていること（写真1）などから、里美仙松が設計と監理を担当したことはほぼ間違いないと考えられる[4]。

聞き取りによれば、里美仙松は長崎県平戸市出身で、大正9（1920）年頃、現在の佐世保市早岐で里美建設を設立し、主に木造の個人住宅を設計していた。仙松の妻フジノが伝三郎の姪であることから、天草の下田で温泉旅館である望洋閣、高浜で赤崎邸の建築を依頼された。また、図3の棟札は仙松が記入したとされるが、設計者である仙松自身の名前は記していない。棟札の裏面の2段目に記されている工匠は里美仙松が長崎の雲仙や島原から連れてきた職人であると言われている。なお、仙松は下田では、望洋閣の他に西島氏経営の湯本屋旅館の設計も行った。

５．まとめ

バルチック艦隊の動向を打電したことで知られる赤崎伝三郎が郷里の天草市高浜に建てた自邸の図面を作成した。さらに、棟札により赤崎邸は昭和12年に建設されたことが確認でき、聞き取り調査により棟梁と設計者の詳細を明らかにできた。

旧赤崎邸（旅館白磯）は、天草地域に現存する唯一の洋館を備えた戦前期の個人住宅であると考えられ、その保存と活用は今後の課題であると考えられる。

謝辞　天草市教育委員会文化課、熊本県立大学文学部米谷隆史先生、旅館白磯の赤崎巧一さん、天草市立天草アーカイブズ、天草市立本渡歴史民俗資料館、松原建設の松原幸高さん、夢ほたるの濱﨑宗治さん、郷土史家の深見行親さん、郷土史家の松本教男さん、鶴崎千春さん、里美チサヨさんにご協力頂きました。また、実測の際には、当時熊本県立大学の本田有紀子さん、明石英理さん、田山地春佳さん、原田紫帆さん、横田ひとみさん、現熊本県立大学４年生の飯島啓太君、上田桂士君、緒方理子さん、西村鮎美さんの協力を得ました。平成 24 年度熊本県立大学地域貢献研究事業の助成を受けた。

注

1）「崎」の字は、正しくは「大」ではなく「立」である。以下、全て「崎」に変換している。

2）北野典夫：波濤を越えて−天草海外発展史（中編）−，みくに社，1981. 1

3）天草地区建設業協会：天草建設文化史，天草地区建設業協会，1978. 5

4）里美チサヨ氏によれば、仙松による日記などは既に処分されており、現在のところ、熊本県側の資料館などだけではなく、長崎県側でも史料を発見できてはいない。今後の課題である。

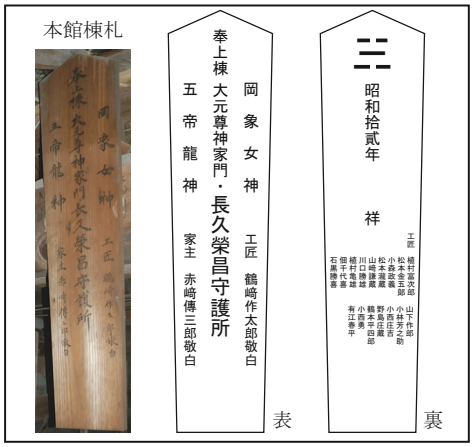

図３　旧赤崎邸（旅館白磯）本館棟札

図４　旧赤崎邸（旅館白磯）離れ棟札

（中央：里美仙松、右端：伝三郎）

写真１　赤崎邸洋館前にて

*1：熊本県立大学環境共生学部　Prefectural University of Kumamoto
*2：熊本県立大学環境共生学部　准教授・博士（工学）　Assoc. Prof., Prefectural University of Kumamoto, Dr. Eng.
*3：アトリエ イマージュ　Atelier Image